



2-013 『ペロの女とぎ話』 ハリー・タラター/イギリス/1923年



2-014
『シンデレラ』著:ギサ・ソワビー/絵:ミリセント・ソワビー
/イギリス/1900年
'Cinderella' Text by Githa Sowerby/Illustrations
by Amy Millicent Sowerby. Published by Oxford
University Press. ©Oxford University Press.



劇作家であり児童文学作家として活躍したギサ・ソワビー (1876～1970) は、アーツ・アンド・クラフツ運動周辺の画家たちの影響を受けた1人。妹の挿絵画家ミリセント・ソワビーを起用して子ども向けのシンデレラ絵本を出版した。柔らかいタッチと淡い色使いで描かれた芸術性の高いシンデレラ絵本には、当時の人々も目を奪われたことだろう。

マクローリン・ブラザーズ社と海賊版の楽しみ

18世紀から19世紀の初めにかけて、アメリカではイギリス同様、チャップブックが人気を集めていました。しかしそれらは、特に子ども向けに作られていたわけではありませんでした。読者を子どもに限定した挿絵入りの本が多数流通するようになったのは19世紀半ば以降になります。

アメリカ絵本出版の時代が開きかけを作った立役者といえば、マクローリン・ブラザーズ社です。1828年にジョン・マクローリンがニューヨークで絵本専門の出版社として設立。カラーの挿絵を大胆に用いたビジュアル重視の児童書を次々と刊行します。そのなかで特に当時の少女たちに人気だったのが1869年に発売された『シンデレラーガラスの靴』でした。よほど好評だったのか、マクローリン・ブラザーズ社はその後も立て続けにシンデレラの絵本を様々なバージョンで刊行し続けました。

マクローリン・ブラザーズ社はじめ、19世紀のアメリカで出版された絵本の多くは、イギリスで既に出版されていたものを複製した、いわゆる「海賊版」でした。現在のよ様な知的財産や著作権の通念が希薄であったため、中身はオリジナルのまま表紙だけ付け替えたものや、原画に新たな着色をほどこしたものがアメリカ版として刊行される状況が続きました。現在の価値観からすると「盗作」ですが、オリジナルとの差異に目を向けると思わぬ発見があります。

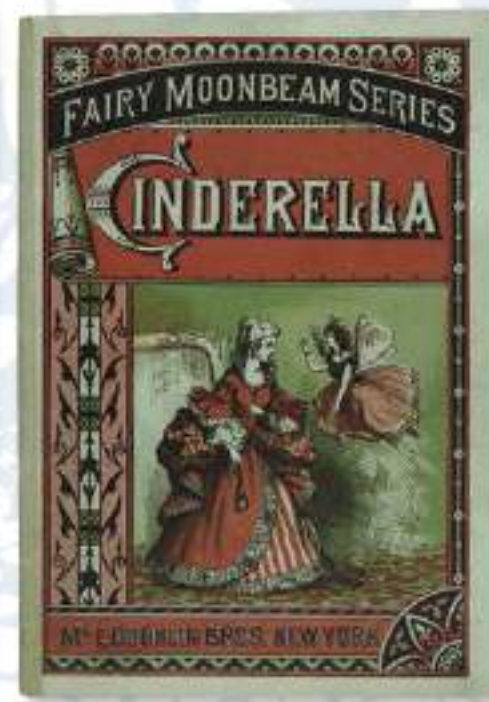
海賊版絵本のなかで主張されるアメリカらしさに注目すると、この時代の絵本の楽しみ方が広がりますね。



2-029



2-030
【シンデレラと小さなガラスの靴】
マクローリン・ブラザーズ社/アメ
リカ/1870年



2-031
【シンデレラ】マクローリン・ブラザー
ズ社/アメリカ/1876年



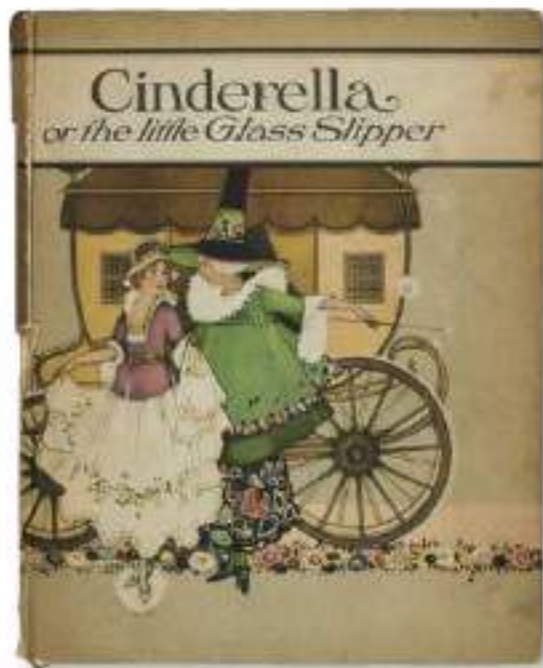
2-032
【シンデレラ、あるいは小さなガラ
スの靴】マクローリン・ブラザーズ
社/アメリカ/1897年



2-033
【シンデレラ】マクローリン・ブラザー
ズ社/アメリカ/1893年



2-034
【シンデレラ、あるいはガラスの靴】
マクローリン・ブラザーズ社/アメ
リカ/1880年代



この時期にアメリカで出版されたシンデレラ絵本は、ヴィクトリア朝風の重厚な挿絵ではなく、アメリカらしいのびのびとした画風に変わっていく。絵本作家にしてアメリカ最大の玩具メーカー「フィッシャー・プライス」の創業者、マーガレット・エヴァンズ・プライスの『シンデレラ』の画風はその典型といえる。

マーガレット・エヴァンズ・プライスは、1930年に夫であるアーヴィング・プライスとヘルマン・フィッシャーと共に玩具メーカー「フィッシャー・プライス・トイズ」を創設。同社の最初のアートディレクターとなり、自身の絵本キャラクターを使ったおもちゃのデザインをした。

2-045
『シンデレラ、あるいは小さなガラスの靴』
マーガレット・エヴァンズ・プライス
アメリカ/1920年



2-046
『靴を履いたシンデレラ』 絵：マック・ハーシュバーガー/アメリカ/1936年

ジャズ・エイジを中心に活躍したアメリカの画家マック・ハーシュバーガーが描いた、ジャズ・エイジ風のシンデレラ絵本。洒落でユーモアに富んだパロディになっており、コルセットを用いないハイウエストのドレスなど、シンデレラの衣装もアール・デコの影響が色濃く出ている。シンデレラの一人称で物語が進行するあたりも、女性の存在が大きく変化したジャズ・エイジらしいところ。



シンデレラの普及と全集ブーム

戦後の復興期を経て1960年代に突入した日本は、高度成長の最盛期を迎えました。首都高速道路や新幹線が開通するなど、1964（昭和39）年の東京オリンピックに向けてインフラの整備が急ピッチで進められ、人々の暮らしも大きく変化していきます。冷蔵庫・洗濯機・扇風機などの家電製品が普及し、カラーテレビの本放送が始まったことでテレビはほとんどの家庭に置かれるようになりました。1966（昭和41）年にはビートルズが来日、特撮・アニメ映画の流行、海外旅行が自由化されレジャーブームが起こるなど、様々な楽しみが世にあふれ始めました。出版業界も盛り上がりを見せ、百科事典や文学全集が大ブームとなります。マイホームのリビングや書斎に

これらを並べておくのが一種のステータスであったのと同時に、子どもたちに豊かな教養を与えたいという願いがあったと思われま

す。「少年少女」を冠した叢書が多数刊行され始めたのは1950年代からで、『世界少年少女文学全集』（1953年創刊・創元社）、『世界名作童話全集』（1962年創刊・講談社）、『少年少女世界の名作』（1971年創刊・小学館）など、各出版社から多数の叢書が創刊されました。シンデレラは当然のごとく世界の名作の1つとして掲載されています。これにより、シンデレラ物語は童話のスタンダードとして不動の地位を築いたといえるでしょう。

2-089
『シンデレラ姫』
須野鶴生/朝文社/1945年頃

ふっくらしたほっぺにおちよぼ口と、日本の幼い子どもをイメージして描かれたシンデレラ。王子様も、リリしいというより、かわいらしく描かれている。



2-090
『シンデレラ』文：北島八朗/画：藤谷虹児/文芸堂出版/1953年



藤谷虹児の美しいカラー絵本。この頃から、アニメの原画や構成も手がけるようになっていた。華やかな装飾の大正ロマン風ドレスのシンデレラとともに、王子様も宝塚歌劇に登場しそうな豪華な衣装で描かれている。